

独 創

ウラン化合物超電導研究グループ 数 又 幸 生

物理屋さんの好きな言葉に「独創的」がある。この言葉をじっと見ていると、何か我々の伝統的風土とは異なった土壤に育った言葉のような感じがして、広辞苑をひもといてみた。

独創；模倣によらず、自分ひとりの考えで独特のものを作り出すこと。

つまり、「独創」は個人あるいは個と云う風土に育っている。これはいつの時代か定かではないが、輸入された言葉であろう。我々の歴史は、常に個を集団の中に埋没させるか、或いは豊かな個性は集団からの離脱を意味していたのではないだろうか？

民族の持つ風土が言葉によって時代から時代、世代から世代へと受継がれ、そして「言葉は神とともにあり、言葉は神なりき」であるならば、我々の持つ伝統的な個の不在を神を通して見る事が出来る。そして、そこに西洋文明との鮮やかな違いを見る。

ヘブライズム（キリスト教）は、西洋文明を形づくっている一つの柱である。新約において神はその契約を各個人の心の内に直接書いた。最初に神と個人との結びつきがあり、個人と個人との結びつきである集団はその後に現れる。しかも旧約の創世紀以来、神は唯一の神（一神教）である。

我々の歴史を古事記に遡った時、天地初発に三柱の神を見る。イザナギ・イザナミ迄の神代7代においていろいろの神を見る。伝来した仏教の影響のもとに今日の日本を素描した17条の憲法の第1条“和を以て貴しと為す、忤らうこと無しを宗とせよ。……”。我々の風土は多神教的“和の世界”つまり個人よりも集団や体制の維持を重視した深層の上に堆積してい

る。西洋的な一神教的“個の世界”とは根本的に異なっているように私には思える。

政治は民族の持つ風土に強く影響される。政治的要請に基づいた研究所もその風土を体制内に反映しているとしても不思議ではない。“和の世界”の継承として所謂“プロジェクト”が存在するのかも知れない。一方、大学はその設立において異なった道を辿っている。伝統と多様な人間模様が言葉では表し難い精神的土壤の肥沃さと奥行をつけている。独創が萌芽するに十分に肥沃な“個の土壤”を持っている。

ぱらぱらと原研の内線電話番号簿をめくって見る。先端基礎研究センター部門に沢山のテーマが並んでいる。“和の世界”の素描に手持ちの全ての絵の具で着色した感がある。玉虫色だ。これもまた日本人好みの色ではある。しかし、色彩が感情を表現出来る手段であることを人類が知ったずっと後に、あのゲルニカを描いた巨匠ですら、一色での感情表現を“青の時代”“バラ色の時代”で試みている。テーマの多様性がリスクの軽減と目前の成功のためではなく、“個”が育つ土壤の肥沃さを求めていることに期待する。科学における「独創」は、宇宙を支配している神の業を盗むことである。先端基礎研究センターは“基礎”であるのだから、神の最も重要な秘策を盗まねばならない。盗みに失敗しても成功しても、プロメティウスの受けた罰が待っている。世間の浮き草のような批評よりはるかに苦痛である。しかし、それでもなおそれに耐えるだけの精神と熟達した業を持つ“盗み”の専門家を充分な時間をかけて養おう。